

第20回日本神経精神医学会

イブニングセミナー

2015 12/11(金) 17:30-18:30

石川県立音楽堂 地下1階 [交流ホール]

金沢市昭和町20-1

# レビー小体病診療における ドパミントランスポーター 画像の有用性

座長

山田 正仁 先生

金沢大学大学院  
脳老化・神経病態学(神経内科学) 教授

演者

織茂 智之 先生

公立学校共済組合 関東中央病院  
神経内科 部長

共催

第20回日本神経精神医学会  
日本メジフィジックス株式会社

 nihon  
medi+physics

# レビー小体病診療における ドパミントランスポーター画像の有用性

**織茂 智之** 公立学校共済組合 関東中央病院 神経内科 部長

ドパミントランスポーター (DAT) とは、中脳黒質のドパミン作動性神経細胞の線条体の終末部にある構造物で、線条体に放出されたドパミンを再取り込みする働きを有する。DATシンチは、DATを画像化する核医学検査で、本邦ではイオフルパン (DaTSCAN®) を用いる。本検査は、中脳黒質のドパミン作動性神経細胞の変性に伴う疾患と、それ以外の疾患を非常に高い精度で鑑別することができる。従って、パーキンソン病 (PD) やレビー小体型認知症 (DLB) などのレビー小体病と他の関連疾患との鑑別に有用である。

## 1) パーキンソン症候群におけるDATシンチ ……………

パーキンソン症候群を呈する変性疾患、即ちPD、DLB、多系統萎縮症、進行性核上性麻痺、大脳皮質基底核変性症では線条体のイオフルパン集積が低下し、本態性振戦、薬剤性パーキンソニズム、心因性パーキンソニズムではイオフルパン集積は正常、脳血管性パーキンソニズムでは集積正常と低下例が報告されている。PDではHoehn-Yahrの1度の時点で既に病巣側と反対側の線条体の集積が半分に低下し、健側も低下している事が多く、PDの早期診断に有用である。ただしPDと他の変性疾患に伴うパーキンソン症候群との鑑別は難しい。SWEDD (Scan without evidence of dopaminergic deficit) とは、PDの診断基準を満たすが、DATシンチグラフィなどにおいて黒質線条体ドパミン機能の異常が認められない病態のことである。SWEDDはDATシンチを行わなければ検出する事は難いため、DATシンチのSWEDD検出の意義は大きい。

## 2) 認知症疾患におけるDATシンチ ……………

第3回DLB国際ワークショップで提示された臨床診断基準第3版で、“SPECTあるいはPETイメージングによって示される大脳基底核におけるDAT取り込み低下”は示唆的項目に追加された。DLBではPDと同様にDATシンチで線条体のイオフルパン集積の低下がみられるが、DLBではPDに比し尾状核における集積の低下が著しい。一方で、アルツハイマー病では通常はDATシンチは正常であり、DLBと鑑別することが可能である。

即ちこれまでのprobable DLBは2つ以上の中核的特徴が必要であったが、中核的特徴1つ以上に加え、3つの示唆的特徴のうち1つ以上あればprobable DLBと診断できるようになり、線条体におけるDAT集積低下は、DLBの診断において重要な位置を占めるようになった。